

「環境教育」

中村 俊一

NAKAMURA Shunichi

「自然環境」と共に歩むキャリア

海岸線から広大な砂漠が広がり、野生のペリカンやフンボルトペンギンなど、多くの海鳥や海洋動物を目にすることができる南米・ペルーの「パラカス国立公園」。世界有数の観光地マチュ・ピチュに次ぐ国内第二の観光スポットとして、年間を通して多くの観光客が訪れる。一方で、禁止されている漁の横行や、漁師・観光客らによるごみの投棄問題などが原因となり、豊かな生態系が危機にさらされているのだ。

「環境問題は、今や世界的な問題です。その解決には国際的な協働が必要で、その基礎となるのが、地域

JICA Volunteer Story

PROFILE

群馬県出身。2012年に東海大学を卒業し、群馬県立ぐま昆虫の森へ入職。キャンプ場での野外活動支援員や養蜂場での勤務、尾瀬国立公園の管理員などを経て、2016年11月から青年海外協力隊（環境教育）としてペルーで活動中。

「子どもたちとつくる美しいペルー」

国内有数の「自然の宝庫」の環境を守るべく、地域を駆け回る中村俊一さん。将来を見据え、子どもたちと楽しみながら自然環境の尊さを伝えている。



における一つ一つのチャレンジの積み重ねだと信じています」。こう力を込めるのは、地域の環境改善に取り組み中村俊一さんだ。観光客への自然保護啓発と、漁師の子どもへの環境教育に注力し、長期的視野での活動を心掛けている。

中村さんのキャリアは、人と自然の接点の中で育まれてきたと言っても過言ではない。大学を卒業後、群馬県の体験型教育施設「県立ぐま昆虫の森」で自然ガイド、昆虫飼育員として働いたのを皮切りに、以降、キャンプ場での野外活動支援員や養蜂場での勤務などを経験。社会人5年目には同県の尾瀬国立公園で管理員として、野生動物の調査や登山道整備に取り組んだ。「自然への興味のままに、今日に至っています」と、中村さんは笑みを広げる。

青年海外協力隊への参加には、人の縁が大きな役割を果たした。学生時代のインターシップ先の自然学校や、学芸員課程でお世話になった博物館の担当者など、人生の節目節目に「協力隊OB」の存在があった。「私も海外で困っている人たちのためになりたい」。先輩らの後押しもあり、国際協力の舞台へと飛び込んだ。

誰もが楽しく学ぶことができる環境教育を提供

中村さんの活動地・パラカスの海は、野生動物や魚介類にとって重要な地だ。海流が多量の栄養を運び、プランクトンも豊富。海中には豊かな海藻の森が広がり、魚介類が多く生息している。それらを狙って多くの野鳥やウミガメなども集まり、豊かな生態系を維持している。

中村さんは「一時的な啓発活動では意味がない」と考えた。そこで、一緒に働くパトリシアさんが主導となって行っている漁師の子どもたちへの環境教育活動を、積極的にサポートすることにした。「パラカスから海の資源が減って困るのは、次世代の子どもたち



a. 学校の生徒に、海鳥の生態について解説
b. 漁師の家族、現地ボランティアと。海洋ごみについて説明した
c. 授業で地球温暖化について紙芝居風に教えた
d. パラカス国立公園で最も有名なラミーナ浜。夏季は多くの観光客が訪れる



学校のお祭りに参加して、旅鳥について説明する中村さん

小さいときから環境を守る意義を学んでほしい」と、周辺地域の学校4校を月1回のペースで訪ね、パトリシアさんや同僚と協力しながら、環境保全に関する授業を展開している。

授業は、実物や模型を使い、参加型のプログラムにすることを心掛けています。「例えば、鳥の話をする際は本物の羽を触ってもらいます。大型のパズルを使って、楽しみながら参加できるような工夫もしています」と中村さん。学校の授業やイベントで、講師が一方的に話すことが多く、生徒や聴衆の集中力が欠けるというケースを何度も見てきたからこそその判断だ。

授業で扱うテーマは多彩だ。海の生態系の多様性や持続可能な資源の利用、気候変化など、総合的に自然環境保全を学べるカリキュラムを構成している。「授業後、『次は何を教えてくれるの?』と子どもたちが話し掛けてきてくれたことがありました。彼らの笑顔と輝いた瞳を見ることがモチベーションです」

そんな中村さんも、着任当初は周囲になじむのに苦労したという。「同僚からは、シュンは最初、『お腹が空いた』しか話せなかったと冗談交じりに言われます。それでも、同僚や現地の友人らが熱心にスペイン語を教えてくれて、コミュニケーションを取れるようになりました」と笑う。当初は一人の時間が取れず、悩んだこともあったというが、現地の文化に慣れ、今では周囲に感謝の気持ちが芽生えるまでになった。「決してうまくはない」と苦笑いするダンスも今では楽しんでしまうほど、現地生活に溶け込んでいる。

2年の任期も折り返しを迎え、ここからが活動の深みが増す時期だ。環境教育はすぐに成果が目に見えるものではないが、中村さんは「環境教育とは、地域をみんなで守っていくための一つの手法です。命の尊さや自然の神秘、恩恵について学ぶことができ、子どもたちの成長の大きな助けになると思います」と強調する。継続は力なりの精神を大切に、任期満了後の地域の未来を見据えている。